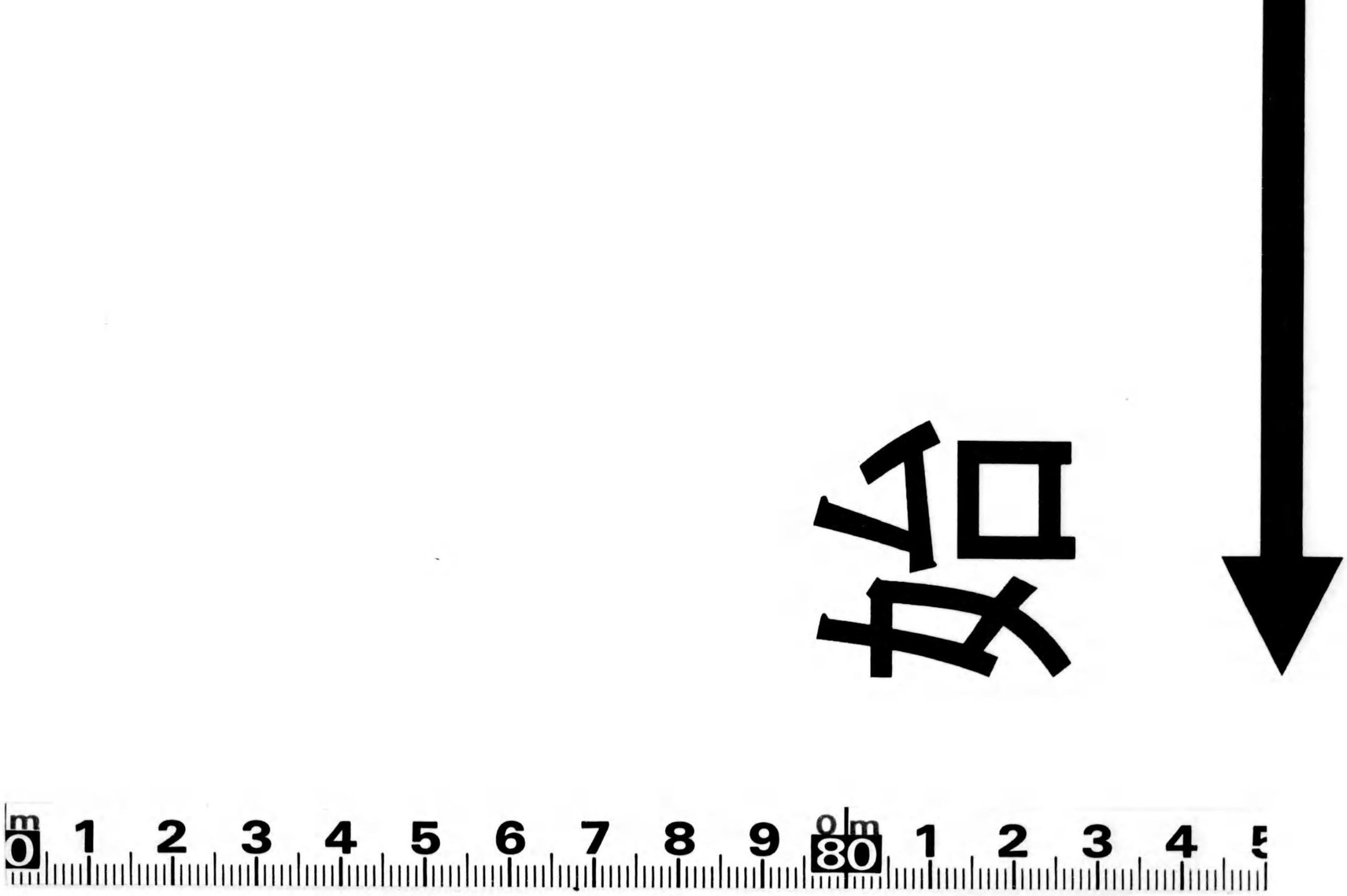
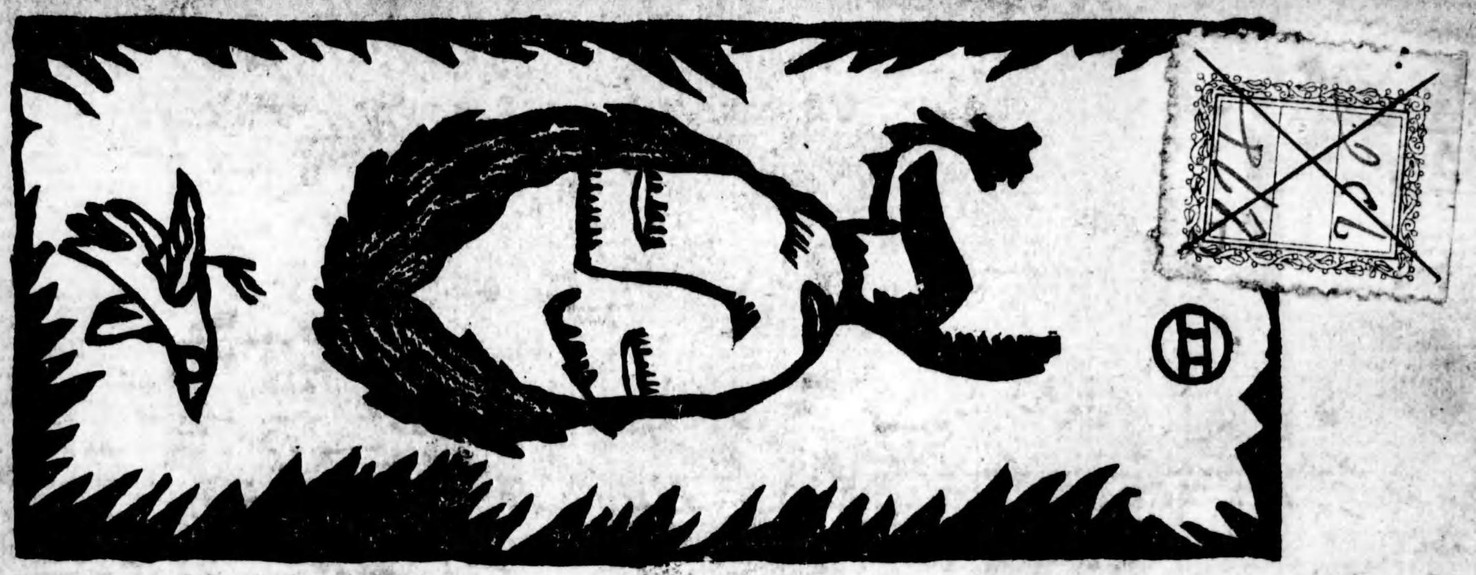

投口



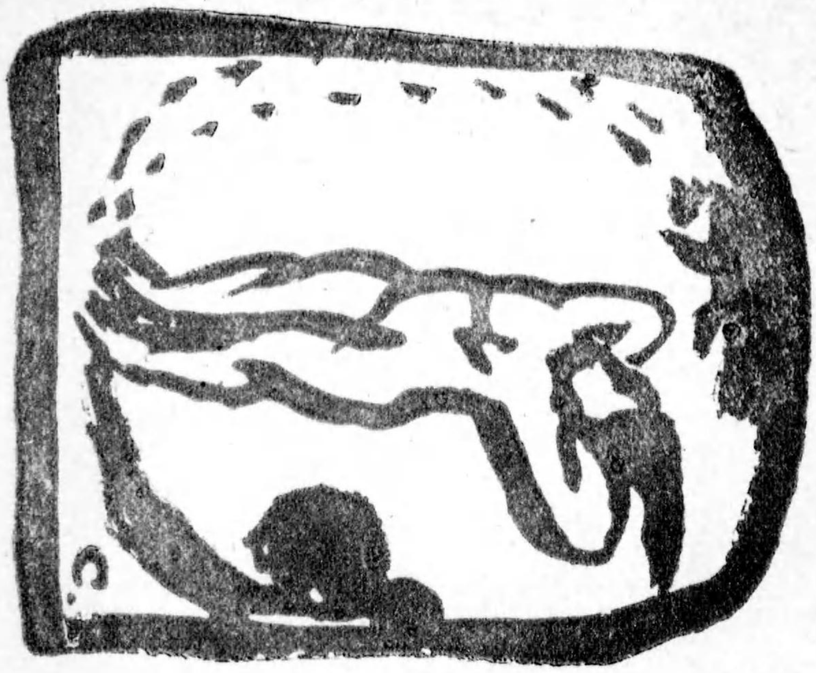
特100
607

淺草の歌

磯ケ谷紫江

大正
5. 9. 19
内交

浅草の歌



序文

私の中根岸の宅には小さい二階があり。名をつけるほどでもないのに。例のもの好きは『味樓』と呼んで居ります。

『味樓』は東南と北方とにむいて。肱掛け窓が開け。上野の森からぐるりと一順お行の松の木末までが。町の屋根越しに展開して景勝を添へて居ます。それで『松末』とも思ひつきましたが。平生食ひ氣が張つて居ますので。簡堂の『饌書』や。『養小錄』

や。如亭の『詩本草』や。梅翁の『眞味考』をこの樓室の机上の友とする私には花より團子。景勝よりは口嗜の『味樓』と呼ぶ事にしました。

『味樓』の隠に凭ると。その東南の隅の簾の影の中空が夜はあかるく。その間に高くあかゝと灯の影がさします。それは淺草の十二階です。夜更けるにつれて。空は澄みわたる。灯影はますます明るくなる。鐘は上野と淺草との双方から幽韻を傳へて來ます。保命酒の小盞を傾けて結び昆布の一片を嚙みますと。世ばなれをしたやうな氣の中

に。浮世なづかしいやうな思ひも起ります。鐘は上野か淺草か。私は風雅でもなく。洒落でもなく一寸中間にうろついて居る。私の即今の俳諧境が夫れで。別に左程行き詰つて居るとも覺えぬながら。ただ色合は極めて鮮明な缺いて居ります。

私は十二階の灯影が見ますと。追憶す。三十年前の夢の影が目さきにちらゝしします。三十年前の淺草はこんなに灯影があかるくはありはしない。私は奥山の今の花やしきが。植六の花園で。そのまへに池があり。池をめぐつて北庭筑波(井伊

蓉峯の父)の寫眞舘があり。畫家吉澤雪庵の茶屋があり。その手前に白石千別翁の幽棲があり。私はその北廂の池に面した一部を借りて小住をトしました。隣りは俳優由之助の妻が居宅でした。私の宅も。小憩の茶店にすれば。なる樣な格構でありました。私は母と二人してここに細い生活を營んで居りました。木立深い間の夜に入れば。小區はまづ闇で梟が鳴く。滿ひとつ越せば『千束』は稲田で田甫越しに太郎稲荷の森が見えたものです。幽雅な境でした。

三十年の歳月は淺草をまるで變へて仕舞ひました。それは根岸だつて。むかしの跡は氣をつけて見なければ尋れ出しかねますが。淺草ぐらゐ變つたところはありません。『刈のけて雁まつ小田の景色かな』『百舌鳴くや木末は昏れて十三夜』(抱一)。これが淺草の小景とは今では思ひつきもしません

紫江さんが淺草の句什を拾つて一卷として。私に一言添へてくれといはれる。私の今の俳諧境は目のまへに十二階のあかるい灯影と。上野の森の幽暗な影との間に。こんな舊い夢の痕がちらちらする。こうして居る内に。十二階の灯影が別の情趣を呼ぶようになるであらうか。種彦の『山嵐』を勇さんの『堂裏』に替へ。保命酒の盞をウンの一杯に盛り替へて。しかるのち紫江さんのこの出板を賀す文を草すほどの元氣になつて見たいと思はぬでもない。一進一退。自ら籠のゆるんで居るのを苦笑するばかりであります。

おたのみにまかして。こんなつまらない繰言を叙しました。卷頭に載せて下さるのをいい氣になつてるのは。古い馴染甲斐さいふものであらう

序文

丙辰初秋

岡野知十

なつかしき『淺草の歌』よ

紫江君からひさしぶりで手紙を容せられた。お互に今はいそがしいからだになつてゐる。以前のやうに、屢々會吟の快を貪る機會の少ないのはいふまでもなく、書信なども疎遠に流れがちである。

こういふ中へよせられた君の手紙を、うれしく開封したことをまづこの文の最初に記して置くことは私のこころよいことのひとつである。

『……嘗て四十三年頃新半面誌上に募集なされた『東京の歌』應募以後今日までのあの稿を續けてまいりましたそのうち淺草に關するのみ嚴に撰びその數千五百句ほどありますうち、三百五十句だけを急にまとめて本にしたいと友人よりはかられてその氣になりました。どうぞ、この『淺草の歌』の序文を御願ひいたしたいものですが、如何なものでお座いませう……』

君の手紙の一節は、私にかう、君が持つ親愛をかたられるのであつた。私のこころは、いまさらに私

たちのたどつて來た過去の道をふりかへつて見たそしてその道のなかばに、紫江君がひとり立つてゐられるのを、しばらく見つめないわけにはゆかなかつた。

『東京の歌』は私たちが、明治四十一年から四十三年へかけて發行してゐた雜誌『新半面』誌上に發表した、同人の新俳句の試作のひとつである。私たちの新俳句は當時の俳句が、風俗の徒の日光見物の土產ばなしでもするやうに、徒らに月花の見物ばなしにとらまつてゐたのをあきたらず思ふあまりに生れ

たのである。ここに出發した同人の製作に對する努力はだん〳〵進んで遂に『東京の歌』に到達したのである。『新半面』明治四十三年七月號の雜記に私はかう書いて置いた。

『前號より在京同人の間に、東京の歌が試みられてゐる。東京の歌は東京の歌である。東京人の內的外的両方面の生活狀態にわたつて、作者が實際上から得た、印象、感激をあるがままに歌はんとした試みである。俳句がややもすると文字遊戯視されるのは、われ等の心外とするところであるが、此の如き

は所謂俳人者流が自ら招く禍である。全人的態度を以て俳句に臨まぬ罪である。われ〳〵同人はすべてこの自覺に立脚して來たのであるが、更に更に一層この態度を切實にしやうといふ考へよりの、第一の試みが東京の歌である。

俳句を古典として片付けて仕舞へば世話のないことであるが、私たちの新俳句は、永遠の生命を持つた詩として、他のもろ〳〵の詩歌と壇上に爭はうといふのが理想であつた。

紫江君は當時壇上のすぐれた攜手であつた。

『新半面』當初の誌上より、君が製作力は常に他を凌駕した姿を見せてゐられたが『東京の歌』にいたつて、鮮かにその特色を發揮して來られた。淺草は特に君が獨壇場の趣を以つて、その作の上にあらはれて見えた。それから今日まで稿をつゞけてその製作をあつめられたと云ふこと、それだけでさへ私は快心に堪えないことである、やがてその獨壇場をせられた『淺草の歌』が一卷となつて世に出ると聞いては、私はこのよろこびを、どうして君に捧げすにゐられやう。

紫江君は、まだ『大川端の歌』『日本橋の歌』『下町の歌』『郊外の歌』等の諸篇を持つてゐられるといふことである。それ等も續々世に出されるやう希望してこの筆を擱くことにする。

大正五年八月

築地瀾青歌樓にて

上田龍耳

自序

この集に輯めしもの、明治四十三年の春より大正五年の春まで最近六年間に渉り歌へる即興千五百首より約三百首を自ら撰びしものにして、かかる無盡藏なる淺草情調の大舞台をことごとく歌ひ盡くそうとは及びもよらぬことながら、この長き歳月をうますあかず不秩序ながらも一卷に纒めし努力を買ふて下さらば私の本望である。

書中註釋を要する箇所あれども出版の都合上

意のままにならず、そのままになせしは私の頗る遺憾とする所である。猶卷中におさむべきものにして Sensual に屬するものは、ことごとく捨つることにした。

享樂の叫び Pleasures の一幕は一つの悲哀な思ひ出の種である。さらばこの一小册子も私にとつては尤もよい紀念であらう。

終りに序文を賜はりし岡野知十先生、先輩上田龍耳兄の御厚意を拜謝し、併せてこの書の上梓にあたり多大の御盡力をうけし橋本靜更兄。次で小生

夢坊、金子千春両君より繪畫を寄せられしことを謝し、出版に際しては印刷及び校正に至るまで土肥平呻君の手を煩はせし勞を深く謝するところである

大正五年八月二十三日午後七時

磯ケ谷紫江

目次

一序文　岡野知十
一なつかしき淺草の歌よ　上田龍耳
一自序
一放浪の群に
一鑿石路
一强き刺擊と光線
一Vermouthの香
一地下に眠れる人々
一赤き灯とドン底
一宵の粧ひ
一表紙繪　小生夢坊
一挿畫　金子千春

放浪の群に

淺草の夢見て紅し初み空

初み空旭を大寺の樹に凭たれ

こころよい日は淺草へゆけ春の風

淺草に遊ぶ春の市街と塔の灯と

生涯を淺草の夢に結ばん春の人

錢、金を氣にするなかれ春の人

泣かさるる夢も涼しい貌にまれかれる

花過ぎや淺草の夢この胸へ

※

たよりなき子も淺草に來て旭を浴びる

放涙の子はまだ泣きあへず淺草に

淺草や日がくれかかる彷徨に

懷が淋びしくなればだまされる

當もなしこころゆくまま春の闇

秩

石

路

CHIHARU

雷門

おりる人は皆降りてしまへり春の街

仲店

やはらかに瞳にうつるものうれし春の風

遐音の遠く消えてゆかしや春の空

仲店を振りかへり見てゆく淺き春

春の雨仲見世の數石に立つかな

淋みしさの顔をそむけて逢へり夜の冬

霜凍る夜の月淡はし店とぢて

梅園

かくばかり春立つ人や女客

久米神社

春風や女名前の赤い幟立つ日

石佛を覗く女は若し秋日和

観音堂

鳩の瞳よ春寒き朝の階段に

もの淋びしけれ登れば堂に夏が來る

あけ易き觀音堂に別れけり

小夜霞　觀音堂に文を見る

朱堂の裏

袖寒し春また淺さき唇をして

六地藏

冬空や香のけむりにむせびゐる雛妓（かんな）

有生有母像

尊さの像よ青葉の影に旭がうつる

櫪八幡宮古蹟

一隅の櫪も忘すれて秋の風

花屋敷

あやつりの幕間ながく眉暑きかな

水族館

あざらしの牙に旭、ひかる春の水

瓢覃池

なかば灯に紅らんとすなり月涼し

掛茶屋

鍛入や捨てられゆく錢、淺草に

四万六千日

雷除けの御符ふところへ夕立す

ほほづきや御堂に集ひ、市を見る

ほほづきやカンテラの燈の流かれたる

露台

冬の夜や遊そべばかるく身をなげる

冬の灯が明るくすぎて血ぞ鈍ぶる

披官神社

新緑や襦子襟の女うつむきに

奥山

忘すられぬ涼しい女の赤襟にふれてゐる僕

小招くかげて招きかへして夜の涼し

私語と夜の灯とふるえゐる春の窓

閣の光りてらせば柔らかに腕やはらかに
限りなき夜もたえ忘すれて生く悲し

凌雲閣

初み空東京の繪圖に見たる塔にして
淺草の夜の空戀し春の塔
夏の塔觀音堂は低く見る

遠眼鏡夏の市街は住みにくし

六　區

秋の夢夢賣る家の灯は低く見て

骨相人相判斷

貌見ればおなじ貌して群ふ暑さかな

一　直

冬の灯や藝者のはいる裏座數

石臼一ツ家舊跡

傳說は尊きものよ春の風

藏前電燈會社煙突

煤煙は東京を包むに似たり春の空

蛇骨湯

蛇の目傘預けて浴びる春の雨

よか樓

春の灯やつかれを忘すれて窓を見る

女みなすなほに座はらせ燕よ

冬の灯のただれヨカローの女かな

ヨカローの灯も冬に入る夢さみし

三味線堀

春の風にごれる船底水底に

向ふ河岸から呼ふ女の肩や若柳

駒形鰻汁

冬の灯や心かなしき紺のれん

蓬莱座

春風やのんびりとした路へ曲る徒歩

東本願寺

夕陽か射せば木の葉も凋ぼむ鳩の瞳に

同宗祖大師遠忌

行春や稚兒出づるとききて待ちあきる

同宮内省舞樂

春の風ふるめかしき舞樂の中に

米久

秋の雨晴れにくき夜空を椽に待つは憂し

居酒屋

冬の灯や腰掛のおきどころ狹苦るし

土手、小島にて

春の灯や側による女をだいぢがりもする

冬の灯にゆつたりと語りなどしてゐる女

竹屋の渡

春の波小さき世界を離なれてまた逢はん

春の川みつめる渦に眼がくらむ

待乳山

月出づる春宵それてたよりなし

葉がくれの月なくなけり子規

化地藏

春の風などて笠着る地藏かな

大鷲神社

冬雲の流がるる低い社殿遠見えて

肩と肩擦れ合ふ女いちらし飾の市

山谷停留場

夏の夜に明かるい街を聞いて見る

奴

川舟をあがれば涼し灯がはいる

中央劇場

時代を追ふてくづれゆくなり二の替

樂山堂病院

春の窓みなうつくしいカーテンに

宮戸座

公園の裏に來て劇を見る春の人

草津溫泉

ふと、おちつき拂ふてみたり春の星

吉野鮨

氣ながに待てば冬の灯ともる頃

柳ばし

春の雨浮いてゐるやう橋の人影も

春の川氣がせいせいしたと云ふ人に

春の橋際は春の吐息をそそらせる

箱枕箱屋は春の人と並びゐて

口先が輕いが仇よ春の人

虫のすく男を枕に換へて春の夢

若柳や河岸をはなれし船の櫓の音に

冬の灯やうちしめる影がながれて

江川一座

梅咲くや江川一座の縫ひの幕

永き日や玉乘過ぎて夜の芝居

夏髪や翡翠もなかん肉襟袢

玉乘やくれかかる秋の雨にして

暮れかかる陽は低し女、玉に乘る

ルナパーク

初つ花や瞳に似るものはみなうれし

同、元祿座

陽に近き天井低し花さくら

金龍舘

秋愁や涙にくれて胸そそる

強さ刺撃と光線

CHKARIN

みくに座

疲れなく見る瞳はつよし春の興

東京倶樂部にて富榮へ

うそ寒く富榮がかたる『宿屋』かな

同、摩津助へ

摩津助の絃の輕さよ秋涼し

同、富春へ

壺坂のかなしき秋のなげきを富春に

同、長登久へ

秋の夜や長登久の刹那悲しき腹切に

江戸舘にて

氣つかひのなき人をたよれ夕涼し

同、小京へ

あぢきなき末がおそろし短夜に

パテー舘にて

美しい貌かはりゆく夜の夏の虫

同、此助へ

ものたらぬ思ひのこして夕燕

文樂座

五人並ぶ秋の女の貌やたれを攫る

木馬館

萬國の旗ふるめかし風薫る

諒闇の通り

かなしみのなみだにくれて幕黑し

VERMOUTH の粕

神谷バー

唇づけのしびれはつよし春の醉
世を家を忘れて春よ醉どれて
唇をあて頬あてて神谷バーの春
こころよき酒の空虛よ秋近し
シードルの甘き唇にも秋の醉

耳底に銀がなる音よ秋涼し

石川バー

春の灯やうつる鏡のエプロンに

赤襟のピンが瞳を射る沈丁花

夏の灯やよりかかる椅子に足組みて

扉をあけて出れば明かるい夏の街

ふと見ればかるくうなづく女秋の影

櫻バー

正宗の酔ひにのぼらぬ秋夜かな

地下に眠れる人々

蓮生古塔（源空寺）

炎天や、塔の苔より水泡に

談州樓燕枝墓（同）

青柳の影を踏みけり墓のまへ

千葉介守胤塔（總泉寺）

あとかたもなくつづるる塔珠くだけて秋暑し

平賀源内墓（同）

秋の蝶ちくはぐの石重なりてあやうげに

根本通明墓（同）

秋の影まだあたらしき碑の面を

齋藤別當實盛梶原權太夫景道

石塔（法原寺）

麗や肌みな荒く文字消えて

遊女高尾墓（道哲、西方寺）

二葉のみ刻む紅葉の地蔵かな

同（春慶院）

秋暮るる碑のまはり見ついくそたび

妙龜塚

秋風や石の宮、石の位碑の丘の上

夕暮の塚を仰ぐや鳥渡たる

柄井川柳墓、堂前の碑を見て(龍寶寺)

冬日影あれし寺堂の碑の庭に

街萬里墓(櫪寺)

春影やほそながき石埋れゐる淋びしさに

家康の側室武田氏良雲院墓(西福寺)

潜くる扉の暑さは石碑の太陽向ひに

勝川春章墓(同)

夏蝶や僧と語たりて探ぐる石低し

高嵩谷墓(同)

春の日の滑めらかな石に倚りて見るかな

鶴賀若狭椽墓（幸龍寺）

行春や卒塔婆は新らしいうちかよし

竹本綾瀬大夫墓（源照寺）

綾翁の墓はかなめの春よ夕淋びし

江川太郎左衛門墓（本法寺）

うつとりと見ればはかなし雲の峰

吉原大文字文楼墓（稱名寺）

花焚くや七夕ちかき空の煙

玉川庄右衛門墓（聖德寺）

春の碑や新らしき斧の跡とめて

玉川清左衛門墓（同）

夏虫や江戸の名殘ものこる碑に

淺利又七郎義信墓（慶印寺）

夕陽はまだ落ちず見上ぐる鉦の涼しさよ

小野次郎左衛門忠明墓（同）

堂裡廢れて供養の標に鳴く蛙かな

蜂谷六左衛門墓（同）

塔碑黑づみて日傾く秋暑きかな

赤き灯ともドン底

松飾りしてことほぎも忘れかちになる女

春の雨片袖濡れて窓へ倚る

醒めし醒めぬ女なりけり初春に

ふと見たる女春また淺きかな

遲き日を待つ身となりて狹き家

春の日の午后のあかるさ眉を塗る

春の夜やいま出て行つた男つれ

春の夜や羽織の紐がさけかかる

春の夜やはづれかかつた竹格子

春雨にぬるる數石枕元

春雨やおさろへる女の皮膚の色

肌ざわりわるき晝なり春の雨

春の夜やなやますことのこころみに

春の夜のうたぐりは強きものかな

春の灯や逢へはみな話は違ふものなれど

春の宵吸ふ唇の裏、嘘のまことかな

春宵や手探くるうちに光る珠

春の宵夢で見た樣な眞似をする

掌にのこるものなく淋びし花の影

もの思ふ光る財布も春の灯に

しとけなきすがたに添はれゆく春の闇

國の家

好色のすれものと生れ櫻かな

皐月

ほろびゆく春の市街よ灯の裏に

二人ともとづるまなこよ春行衛

十六の春は櫻のちる頃に

獣に似る瞳はかなし櫻かな

またの日のまたれぬものを櫻かな

ほほゑみはなつかしきもの初櫻

すげもなく別かるる灯影徂く春に

※

夏の日や矢張り小さい家が立つ

夏の窓、よりよきはなしそのゑまひ

五月雨そうしたことが氣にかかる

夏の夜や姿は見えず卷煙草

夏の夜の曇りがちなる街の端

夏の夜やその先の話をいはず

夏の灯や千束町の別かれ路に

夏の灯や折目ただしき新聞紙

夏の灯やレモンの汁を眉に塗る

夏の灯や住み換へて見し女の暗い貌

夏の灯と虚榮と夢の群がりと

夏の灯やことばかへしに青くなる

夏の灯やはしたなきやう話して

塔の灯を見上げて軒に立つすすし

涼しさやすぐ握り合ふ掌

涼しさや袂を輕く握ぎられて

だまされた夢から醒めて殘暑かな

涼しさや思ふこともなく當もなく

青簾敷石またげばまた呼びかへす

くちびるをかむこと知らで薔薇の花

覗ぞかれた部屋の神棚灯あかるさに

蛇苺ふるる汁みな陽に死して

春　本

翠菊や夢に似よれる部屋の隅

晝の街

もの淋びし貌淋びし憂ひの夏あつし

燕やあつた樣見た樣な貌をして

『寄つていらつしやいよ』

夏の日をふりかへるよりあつくなる

德　兼

夏の影けもののごとき瞳をすへて

牡丹や女のかたき扉をあけて

いちかは

太陽は沈づむ灯の海暑くるし

新聽令後

闇の夜の路次へさめたる夏の貌
夕貌やうちあかぬ日が延ゃに
ものたらぬ貌が淋びしい灯取蟲
青簾へさわる右の袖
瓦斯燈の消ゆる軒端の蝙蝠に

※

おちつかぬ秋の心よみな泌みる
女ゐる家はなづかし星月夜
風鈴や影に立つうつくしさ寄り添ふて
淋びしさの秋の愁ひの咲らく日に
秋雨や逢へばひつかけ帶をして

秋も來て可愛ゆい小袖に花が散る

淋びしさやくれゆく秋のもの思ひ

秋の灯に印象の薄い影かな

秋の灯の影に乳房見る鏡かな

行秋にだまされてみたくなる日かな

亂菊や部屋かへをしたくらき灯に

毛壇を敷いてあかるい秋の灯の店に

＊

夜の窓の硝子は冷へて冬淋びし

寒月やつき合はす軒を傳ふて拔ける路次

冬の夜や新道をまがつだ角の二階家に

世にすれて語たる霜夜の女かな

夕暮の火鉢をかかえ窓の際
横顔をのぞけばぬるる灯に白粉とけて
明けの鐘なればいづこの家も眼がさめる

新聞縱覽所

長き夜のその言葉よりより悲し
冬の灯やいやにつめたい掌て握る

宵の粧ひ

今年もよく通へ江戸の春かな

突羽子會（紀の國屋）

御降りや淋びしい人はみなこずに

＊

諒闇の春沈づみて悲し身にしみる

＊

今は昔男ありけり春の風
あでやかな灯が瞳にとまる行春に
春の灯や頬あてがはれゐる頬に
春の灯のかりそめごとよあつき唇
春の灯はみな僕のこころをくらくする
ものたらぬことはない春の雪にして

男にだかれてゐるうちうれし春の鳥
天下もとれぬ男と生れ櫻かな
さぐるものみな珠となる櫻かな
日本の人みな吉原を知る櫻かな
生殖にたれをたよるや春の雁
酒の香の夢を求めてうつつなし

夜櫻や紅涙の影をうつして

花咲かば夜の國酒のたかぶるに

ひとしきり花のくるわの夢がたり

廊の晝

春の日やはまきすがたの薄い眉

引手茶屋

吉原や柳ながらにしなたれて

影店

廊の夢、冷やかに灯に透ふ見返り柳かな

日本堤（聖天町より山谷橋筋同じ聖天町より箕輪へ一筋と堤ありしを二本堤又は日本堤と云ふ）

夜の俥、春の廊の灯はゆれて

土手八丁（聖天町の木戸口より吉原の入口までを云ふ）

淋びしさは春のこころの置場所に

新角海老樓バー

うつくしい女は淋びし春の宵

とても駄目と諦らめてゐる女に手紙をやる日かな

振りかへれば影は消えゆく春灯かな

切符見世

春の灯や窓テーブルの上塗りに

※

夏の灯や格子のうちをあるかせて

夏の灯や引き寄せる柔らかき掌の平に

夏の灯よ醒めやすき夢と腕とを換へて

杜鵑泣く夜となりて赤い紐

杜鵑めざめのわるい鐘がなる

どん底へ陷ちてゆく身よ薊かな

柔らかい手にだかれて見よ紅牡丹

芍藥は開かぬもよし遊女かな

大火燒跡所見（吉原大火の三十六回目に當る、中にも安政卯二年十月十二日丁度二十四回目には遊女五百三十六人燒死す と云ふ）

五月雨や燒場のあとの土盛りに

梅雨近き店のにほひの假宅かな

張り店

涼しさや鏡の人と背合せに

遊歩

涼しさの瞳にしみる赤き布かな

諒闇中

淋びしさの瞳をして夏の灯影かな

幅せまき引掛帯や夏の椅子

絹燈籠

燈籠の影あちきなくゆく夜かな

燈籠の灯あかるみの物足らぬかな

吉原華壇

暖かけのうしろ灯が見え池涼し

見返り柳

四代目の柳若けれ夏の灯に
見かへれど何の印象もなし夏柳

日の出屋、石子

思ひ出のある夜はゆかし葉櫻に
葉櫻や夢あはく淋びしくたまれ

引付

涼しさや向ひ座敷かよく見えすぎる

營業停止店

大扉には灯もなくあはれ夏の闇

情死

華やかな夢の名殘の明易し

行燈部屋

うすくらき灯の影にして泣く瞳かな

新聽合後

吉原は淋びしいところところてん

燕や髪に符じて銀の櫛

氣拔けする椅子によらばや苺酒

冷笑のかげに生くるけものの くすぐりに

わざわひはさかくかくれて夏の灯に

うたたねのむづかゆく這ふ夏の蟲

それは見ぬ世の夢ならし夏の闇

世間並忘すられてゆくこと耳に鐘涼し

※

秋の雨しめる煙草に火をつけて

秋の夜やつめたき夢の胸を這ふ

秋の夜のうしろつきよし帶の幅

あかるさにみだるる聲の秋夜かな

更くるまま瞳の鈍ぶる秋の夜の女かな

淋みしさとふける秋の夜のつかれと

秋の灯がいたづらにはきこころを

行秋やさはればつめたい格子先

菊の香のうしろすがたがうれし立鏡

尾張樓

灯にうつる寢顔は淋びし菊の花

諒闇中

秋の夜や夢さびしさの店にゐて

仁輪　加（明和四年の秋初めて行はる）

秋の灯に屋台引きゆく車かな

＊

灯を見れば家をも忘すれ霜凍る

醒めやすく疲かるる眼の底冬夜かな

落ちつかぬ屏風の影や除夜の鐘

吉原や明けの扉くぐる酉の市

千鳥なくや黒瓶は隠くされてある

小夜千鳥白粉は冷めたく沈づむ

水仙や下心ある寢とまりに

水仙や上座の位置をみそなはし

浦里が死んでゆく様な雪鳥かな

畫　店

末枯やうすくらがりの店にぬて

積　夜　具

冬の灯や『小町』と夜具の縫ひの紋

森田屋お富

冬の灯や小いさい唇でものを云ふ

紀國屋お染

おちつきのない貌して冬の灯の影に

雪の夜（大正四年十二月廿七日）

廊の雪ただ瞳にうつる紅き灯に

袖の雪胴震ひしても立話かな

同夜越後屋のお爺と語る

屋台よりのぞけば傘に積もる雪

角海老樓

夜の雪鳴る角海老樓の時計かな

見返る夜の灯と雪に誘はれて

人影も灯影も消えゆく廊の鐘

終

大正五年九月十五日印刷
大正五年九月二十日發行

淺草の歌
定價四拾五錢

著者兼發行者　磯ヶ谷亮一

印刷者　東京市麹町區三番町六十九番地　宮西外治郎

印刷所　東京市麹町區三番町六十九番地　邦文舍

發行元　東京市麹町區九段坂下　つるや畫房
振替東京二三八八四番、電話番町三四五八番

不許複製

410
930

終